

7月2日付けの朝日新聞に掲載された「認知症の人とどう向き合うか」という新聞記事を読んだ市長と話をした職員の所感です。

*この文章は、市長自身が話した内容ではなく、市職員の所感になります。ご了承ください。

今年4月、名古屋高裁で、徘徊症状のある認知症の方が電車にはねられ、死亡した事故で、「見守り義務を怠った」として配偶者に賠償金 360 万円の支払いを命じる控訴審判決が出たことは、記憶に新しいと思います。この判決を聞いたとき、きっと誰もが「家族だけで見守ることができるのか…」と不安に思ったのではないのでしょうか。

この判決を受けて、家族に見守り義務がある以上、認知症の家族をなるべく家に閉じ込めておこうとする人もいるかもしれません。介護する側も、介護を受ける側も、思うように出かけられないストレスから、互いにイライラして暮らすことを強いられてしまうでしょう。

① 笑顔であいさつ ②目を見て話を聞く ③言葉遣い が、認知症の方と対応するとき大切なことだそうです。介護する側がイライラしては、当然、笑顔も出ませんし、身内だけに言葉遣いもきつくなります。こうしたストレスは、認知症の症状を悪化させてしまうそうです。

地域で見守る

以前、市長と車で移動している際、こんなことがありました。

少し離れた農道脇に、四角い黒いものが落ちていました。私は、「何か落ちているな。」と思っただけでした。すぐさま市長は、「さっきの道に戻って、農道に入ってくれる？」と言いました。「黒いものが見えた。車椅子の人があぜ道に落ちているのかもしれない」というのです。幸い、それは不法投棄されたテレビ台でした。

市長は、普段から車に乗っている間中、キョロキョロと窓の外を見ています。高齢者がコンビニの前や道端に座り込んでいないか、不自然に遅い時間に歩いているかなどを気にしているそうです。そうした市長の行動を目の当たりにし、最近、私も、運転中、バス停に座り込んでいる方や杖をついて一人で歩いている方を見かけると、気になるようになりました。ただ、残念ながら、車を止めて、声掛けをするまでには至っていません。そのことを市長に話したら、「まずは、気にすることが大切。そうすれば、徐々に声掛けができるようになる」と言われ

ました。

こうした「気にする目」を一人ひとりが持ち、気になる行動をされている方に対して、「今日はどちらまでお出かけですか?」「一人で大丈夫ですか?」と声掛けができれば、徘徊で行方不明になる方をより近所で発見できるかもしれません。

市としても、市内で営業や配達などの業務を行っている71事業所と「地域見守り活動協定」を締結し、不審に感じることはあるときは、すぐに市役所に連絡をもらうようにしました。

今年、秋ごろには、「市内一斉徘徊高齢者搜索模擬訓練」を予定しています。将来の自分自身の問題として、見守り活動に関心を持つ人が少しずつ増えていけば、より安心して住み続けられる長久手市になると思います。

私自身、今後、同居している両親の介護が必要になったとき、一人で問題を抱え込んでしまうような気がします。そのときに周りの方が、「一人で大丈夫?」「こんなサービスがあるらしいけど、知っている?」などと少しでも話を聞いてくれたら、どんなに気が楽になるかと思っています。もはや他人事ではなく、近い将来の自分自身の問題だと強く感じています。